

時代を眺む

渡辺 利夫



尖閣諸島周辺で領海侵犯した中国漁船が、日本の海上保安庁の巡視船に故意に衝突するという事件が起こった。それに伴い中国人船長を逮捕、拘留したのは当然であった。船長逮捕に対する中国の反応が、まずは東シナ海ガス田共同開発交渉の延期、次いでフジタの社員四人の拘束、レアアースと称される希少金属の輸出停止等であった。

漁船衝突事件の学習効果

これに対して、あることがか、那覇地検は船長を処分保留のまま釈放してしまったのである。地検は釈放の理由を、将来の日中関係を配慮してのことだと述べた。記者会見に臨んだ那覇地検次席検事の山口をテレビで見ながら、私はしばし呆然であった。更に察知し、すかさず中国政府を力感を抱かすにはおれない。日本の政権の無気力を鋭敏に察知し、すかさず中国政府

れている。主権を侵害されても冷静に冷静に、と言いつばかりの日本の外交の方がいかにも異様なのである。隙を見れば突く、退けば押す、というのは人間関係において不徳義であろうが、国家間や民族間においてはむしろ常套である。身も蓋もな

ない。中国の謝罪要求に応じるつもりはないと菅首相は言うが、もう遅い。尖閣諸島ならびにその周辺に広がる日本の領海はこれを侵犯しても、日本は所詮はこの程度の対応に終わるといって「学習」を中国にさせてしまったからである。日中間線を越え、周辺海域から尖閣諸島へと向かう中国船舶の数は着実に増加していくに違いない。

この学習効果は韓国やロシアに及んで、竹島や北方四島の領有権に対する彼らの対応をいよいよ頑ななものとしよう。現に、衝突事件後に開かれた中口首脳会談は、領土問題についての中口「共闘」を示唆する声明を発表して終わったではないか。東アジアの大国日本が中国の強圧に易々と身を屈するその姿を眺めて、西沙諸島、南沙諸島での領海問題をめぐって中国との間に緊迫の課題を抱える東南アジアの国々は、心底深く日本の対応に失望しているに違いない。失望が侮蔑にまで変わっていくことを私は恐れる。米政府から、尖閣諸島は日本の領土であり、それゆえ日米同盟によって防衛されるべき対象であるとの声明を受けたが、安堵するのはまだ早い。東シナ海の制海権を求めて強硬策を繰り返す中国を前にしながら、主権侵害に全力をもって抗しようとする日本を、米国が見限らないとは言えない。実際、尖閣諸島は日米同盟の対象外だと発言した米国要人が、駐日大使としてかつて赴任していたではないか。(拓殖大学学長)